1

『おもろい刑事物語』

脚本：寺沢憲重

第一場

刑事部屋と取り調べ室。

机の上には書類などが散乱している。

デカ長のデスクだけは整理整頓されている。

出勤した七人の刑事。

有田（女性）「お早うございます」

刑事の皆さん「お早うす」

有田「自分の机の上ぐらい、片付けたらどうなのよもう、デカ長を見習いなさいよ」

（と、いいつつ、みんなの机の上の物を片付ける。）

萩　「最近これと言った事件も無くて、デカ長も暇だからね…」

万年　「男やもめにうじがわくー」

（浪花節調にうなりながらからかう）

九谷　「二十五歳は適齢期、三十過ぎたらみそじ、四十過ぎたら行かず後家、なんてね」

有田　「ナ、何よ、今の言いぐさは」

デカ長　「萩君、失礼だよ　そんなこと言っちゃ」

九谷　課長、いつも言っているじゃないですか、いかず…」

慌ててデカ長が九谷の口を塞ぐ。

九谷　「ムムムムッ」

（口をふさがれて息が苦しくなる）

デカ長　「イカス、イカス、い、い女だなあと…ネ」

万年　「ソそうですよ、有田君は、こえだめにつるってね」

備前　「あほ、こえだめじゃなくって、

はきだめにつるだろう…んもう」

立杭「有田くんに、どうしていい男が付かないのか？不思議ですよね」

万年「灯台もと暗し、案外近くに、この中の誰かと…？」

萩「美人で頭脳明晰、有田さん

だったら今迄に五人や十人の男にくどかれてますよね」

（有田、まんざらでもなさそうに）

有田「イヤだわ、からかわないでよ、そりゃね、私だってェ〜、こう見えても〜ぅう〜ん」

デカ長「あっ、有田君お茶を入れてもらえんかね」

有田「ハイすぐに〜」

（色っぽくしなをつくり湯沸かし室へ）

一同「ぷふふっ」

（首をすくめ、顔を見合わせて笑う）

デカ長「おいおい、仕事だ、仕事」

（せかすように手を叩く）

（その時、けたたましく電話が鳴り響く）

万年「もしもし捜査一課　はい、はい、え〜！、フン、フン、ハイ、ハイ、ハイ」

備前「万年さん、そそっかしいから

又何かやらかしたの」

万年「ハイ了解！」（電話をおき）

立杭「えっ、平成の平安境と言われし

「事件だよ事件、殺人事件だ！」

我が官内に殺人？」

九谷「やま、やまだよ、ど、どこの誰が、

な、何をしたんだ」

デカ長「何を言ってるんだ。

このおっちょこちょいが、

早く現場に行かんかあ」

一同「現場に行ってきます」

（慌てふためいて出て行く）

有田「ぬるま湯にどっぷりつかって、

うだつの上がらない刑事

ばっかりで課長も大変ですね」

デカ長「うゝうゝうゝん」

（頭をかきむしる）

第二場

刑事部屋、事件現場の捜査から帰ってくる。

備前　「課長、ただ今帰りました」

デカ長　「うーん」

（刑事ドラマの気分で格好つけて頷く）

九谷　「こ、殺しですお年寄りの

お婆さんが首を絞められて、

ひ、一人身の七十八歳の

お婆ちゃんが自宅の部屋で」

デカ長　「ちょっと落ち着いて、

順序立てて報告しなさい」

備前　「自宅、六帖の居間で、

七十八才の女性が死亡、えェ〜、

死因は絞殺です、殺害に使った

ロープは見つかっていません、

部屋はそれほど荒らされた

形跡はありませんでした」

（報告できたことを自分で頷く）

萩　「お婆さんの指に髪の毛が付着していました」

犯人のものと思われます。

首を絞められて争ったときに、苦しまぎれに犯人の髪の毛を引っ張ったんでしょう」

九谷　「こ、こうか

（後ろから萩の首を絞めるマネ）

萩　「うう〜」

（九谷の髪の毛を両手で引っ張る）

九谷　「痛い、痛いっ、

毛、毛抜けるやんか！」

デカ長　「犯行の目的は怨恨か物取りか」

（必要以上に格好をつけて言う）

備前　「近所に聞き込みをした結果、お婆さんは金に不動産、そこそこの財産があり、何不自由なく暮らしていたそうです。

デカ長　「ふうん、ふうん」

（ますます、その気になっている）

備前　「人に感謝されても憎まれる

ような人じゃ無いって…」

デカ長　「う〜ん」

（机に短い両足を乗せ腕を組む）

九谷　「刑事ドラマの見過ぎだよ」

（呆れ顔で小さく呟く）

デカ長　「エヘン」

（照れ隠しに空咳をする）

萩　「玄関先にはベコニアの鉢が

並んでましたよ」

万年　「花が好きだったんだな、

ベゴニアねぇ・・・」

第三場　「幕間」

殺人現場のご近所のおばさん達。

A子　「お隣りのお婆ちゃんが、

殺されるなんてねぇ」

B子　怖いわね、こんな近所に

殺人事件が起こるなんてねぇ」

C子　「不安で夕べは寝つかれなくて」

D子　「いつもきれいな花を頂いて、

この間もピンクのベゴニアを、

根が付いたからあげるわと言って

分けてもらったの」

A子　「私もよ、頂いて三年目に

なるかしら、毎年花が咲く度に、

お婆ちゃん見てって楽しみに

していたのに・・・」

C子　「そうよね、花が好きでやさしくて、

あんな良い人を・・・」

D子　「お婆ちゃんには色々教えられたわ」

B子　「ねぇね、どうして殺されたの、

犯人は顔見知りかしら、

殺人強盗なんてねぇ！、

ああ恐ろしい恐ろしい」

三人　「シィー」

（三人揃って、口を押さえ肩をすくめる）

（人が来る気配を感じてその方向を見て）

C子　「あらっ！昨日見た刑事さんが来たわよ」

D子　「うちにも聞き込みに来てた、確か万年とかいう刑事よ」

B子　「人のよさそうな刑事、あれで刑事が勤まるのかしら、万年平刑事だったりしてねぇうふっ」

ACD子　もう、止めなさいよ」

（口を押さえ笑いを押し殺して立ち去る）

刑事達が聞き込みから帰ってくる。

有田　「はい、どうぞ」

（それぞれにお茶を配る。）

デカ長　「何か、手掛かりは…、手ぶらじゃないだろうな」

万年　「近所の主婦の証言によると、仏さんは、かなりの財産を所有し長男は神戸で「トレード峰

カンパンニー」とかいう

小さな貿易商を営んでおります」

立杭

「何か変だネェそれを言うなら、

トレイドカンパニー峰じゃねぇの」

デカ長

「ううっ、そんなこたぁ

どっちでもいい、それで」

（かなり苛ついたように急かす）

万年

「一時はバイアグラで、こそくに

儲けていたらしいんですが

医療用医薬品の承認を得てからは

経営も不振続きで」

備前

「そのことですが、神戸まで行って

最近の動向を調べてきました。

母親の元へ頻繁に訪ねています。

資金繰りの相談をしていたようです。

万年

「そう言えば、墓場まで

持っていく気かよと、

ボソッと独り言をぼやきながら

帰って行ったのを、

向かいの主婦が偶然にも

聞いたと言っていました」

有田　「お婆ちゃんは最近息子のことで悩んでいたようです。親は子供が幾つになっても気がかりで、息子が頼って来ると、これ以上甘やかしたらあの子は駄目になると思い、心を鬼にして邪見に追い返したことで胸を痛めていたようです」

デカ長　「むすこも…容疑者の一人か？、その線で、動機がはっきりするまで徹底的に洗い直してくれ」

九谷　「課長、僕の調べでは…」

デカ長　「ン！」

（面倒で聞きたくもなさそうに腕を組）

九谷　「あのう職員が出入りしていますぅ、市役所の福祉課で、老人の世話をしてる人です」

立杭　「定期的に老人宅を訪問し老人介護をする福祉課の方ですね」

九谷　「その福祉の人ですが、競馬が好きで借金だらけで同僚に借りたり、前借りしたり、サラ金にも借金があります。普段はおとなしく生真面目なんですけど、競馬場に行ったら別人２８号で、人が変わったように

それ行け、よっしゃ、来た～鞭や鞭、やったあ～入った取った取った～と、大騒ぎし目は血走り…！」

デカ長　「あぁ、競馬好きは解ったから、その先続けて」

九谷　「はっ、女房にも逃げられ現在独身です。ところが、最近、財布の中身に、万札が入っているのを金を貸していた同僚が食堂のレジでチラッと見て、貸した五万円返してと言うたら、せかさなくても近いうちに返すよ、

と、言っていたそうです」

デカ長　「よくそこまで調べた。

二人目の容疑者かぁ・・・」

（がぜん色めき立って来た）

九谷　「んん、うふん」

（得意気に万年の顔を見て咳払い）

（萩ぷあデスクの横に廻り）

萩　「課長、お婆さんの身辺調査をしたところカラオケ同好会の中に何となく気になる人物が浮かび上がってきました」

デカ長　「ほう、で、それは」

萩　「その女性なんですが、近所に住む四十八才で大柄な体型で、いつもど派手な格好が好きで通称ナニワのサッチーと呼ばれ、今まで再三に渡り三十万とか五十万を工面して貰い借りては返すを繰り返しています。不景気な時に店を改装し、

その費用と問屋の借金を合わせて三百五十万円程

あるそうです。

店の経営を立て直したい、

見栄を張っていたい、

動機はまだまだ不十分ですが…」

デカ長「尻尾を掴むまで、その女性も徹底的に調査を続けてくれ」

萩「はい、あの日のアリバイを確かめてみます」

デカ長「三人目の容疑者はブティック経営のナニワのサッチーか…？」

備前「どうかなぁ、中国の諺に「李下に冠を正さず」と言うのがある、その反対は疑わしきは罰せずと言う。まっ、言ってる事はもっとも らしいが、調べたことを犯人に結びつけたデッチ上げだ、噂話しに過ぎないと思うけど」

一同「何やて！」

（唖然とする、そのうちの一人から）

備前「私はね、この度の事件は、行きずりの犯行だと睨んでいる。あの町内で顔見知りが犯行に及んだとは思えない、お婆さんを殺してまで金を奪う奴はいない、直ぐに犯行がバレて捕まってしまう」

萩「行きずりの犯行と、言うんですか」

（若干憤りながら言った）

備前「前課者か、独居老人を狙った犯行」

万年「高齢化社会、独り住まいの悲劇、余生を楽しく送ろうという時に…」

立杭「最近の新聞記事で読んだ強盗事件によると、捕まったその犯人は、独り暮らしの老人ばかりを狙っていたそうです。オレオレ詐欺の手口も高齢者がターゲットだ」

デカ長　「う～ん流石備前くん、目のつけ所が違うね、行きずりの犯行説か…！」

有田　「課長、参考までに…」

デカ長　「えっ、まだ他にも容疑者がいるのか…！！！」

（呆れ果てて、顔を歪めた）

有田　「被害者は前日の二時、銀行に行って三百万おろしています。銀行を出てすぐ男とぶつかり、持っていたハンドバッグの中身が歩道に散乱したそうです。その時ぶつかった相手はすまなそうに、ぺこぺこ頭を下げスミマセンと謝りながら風呂敷から飛び出した封筒を拾って上げていたそうです」

デカ長　「引き出した三百万が現場から消えている？で、男はその封筒の中身を見たのか？」

有田　「それは分かりません、

その日は駅前の駐車違反の

取締り日で、偶然婦人警官が

その一部始終を見ていたそうです。

デカ長　「その婦警さん、

ここに来てもらいなさい」

有田　「はい、交通課へ行ってきます」

デカ長　「ぶつかった男、

どこの馬の骨だあ～」

（デカ長困り果てて頭を抱える）

萩　「容疑者の特定、犯人の割り出し、

こりゃ大変だなぁ…」

万年　「それを追求し本星を挙げるのが、

我々の勤めですから」

備前　「税金の無駄遣いと

言われないように、

一刻も早く犯人を逮捕し

平穏な日々を取り返しましょう」

一同　「おう、任しなさい」

（やる気満々になって胸を叩く）

第四場

幕間に「おばさん四人の井戸端会議」

事件のこととか日常の会話（アドリブ）

（報道関係者がおばさん達に近づき）

記者K「事件のあった前後の事とか変わった様子を聞きたいんですが、何か知らないですか？」

一「何もないわよ、警察に喋ったことと同じよ」

二「警察に行って聞いたほうが早いんじゃないの」

三「ねぇねぇ、カメラで撮ってるの、ニースに写るの恥ずかしいわぁ」

記者Y「まぁまぁ、被害者の事とか、犯人の事とか何かないですか？」

四「でもねぇ、口は災いのもとって言うでしょう。こう見えても無口なのよ」

一

「よく言うわ、先まであんなに

ペチャクチャ喋ってたくせに」

二

「喋り出したら止まらない、

ブレーキの壊れた自転車で、

坂道を下るようなものよ」

一二三

「そうだよねぇ〜もお」

（おばさん達の笑いがどうにもとまらない）

記者M

「あの〜一人暮らしのお婆さんが、

殺されたことについては何か」

（笑い声をかき消すかのように大声で聞く）

四

「そりゃあのお婆ちゃんのこと、

この辺では知らない人は居ない

くらい知り合いが多かったわよ」

記者K

「そうですか、それで〜、

どんなふうに…」

三

「他人（ひと）には親切だし、

優しくて如才のない人だったわぁ」

二

「この間も通りすがりに、

いつも奇麗にお花咲かせてますねと、

声掛けたら、この花どうぞ、

持って帰ってって言ってくれたの、

枯らしちゃもったいないからと、

断ると、花を見て美しいと思う

貴女なら大丈夫よ、きっと来年も

咲いてくれますよって、

言ってくれたの、やさしい蘊蓄の

ある言葉でしょう。感激したわ」

四

「あなたの口から蘊蓄だなんて、

花の育て方を聴きに行っては花を

分けて貰い、花を貰ったお礼にと

言ってケーキを持って行き、また、

花を貰う、要領がいいんだから」

記者K

「お婆ちゃんの趣味は花を

育てることだったのですね」

二

「そんなこと言ってるんじゃないの、

そりゃ花は好きだったけど、

一人暮らしって何かと寂しいでしょ、

花を見ると癒され気が紛れるのよ」

三

「趣味はもっと高尚なものよ、

日本舞踊に茶道に詩吟、ええと、

なんでも師範格よ、お婆ちゃんの名誉のために言っとくけど、書道のお師匠さんだったのよ」

一

「私の子供が小学生のとき習っていました。子供の心に溶け込んで教える立派な先生だったわ、六年のときコンクールで優秀賞を貰った時にお陰様で有り難うございましたとお礼に行ったら、おめでとうよく頑張ったわねと、子供をほめ、私にもお習字に打ち込める環境を作っている貴女も素晴らしいからよって私まで褒めてくれたの」

（と、涙声で伝えた）

記者M

「素敵な方だったんですね、惜しい人を…、それで、犯人について何か…？」

四

「解る分けないでしょ、素人考えで推理して、もしかして

あの人じゃないかしら

何て言って、真犯人でなかったら

すっごく迷惑掛かっちゃうじゃない

めったなことは、言えないわよ」

記者M　「ということは、何か犯人の心当たりでも…、あるのでは…」

四　「もう、しつっこいわね」

記者Y　「知り合いのお婆さんが殺された。その犯人に対する怒りとか、言いたいことはないですか」

三　「そりゃあるわよ　お年寄り、弱いものを襲う卑劣な犯罪者を早く捕まえて、一生牢屋に閉じ込めて、苦しめてやればいいのよ」

二　「高齢化社会と不景気続きで、失業者が増え、犯罪件数が増える、お婆さんは、そんな不況社会の犠牲者なのかも知れないわね」

一　「だんだん　世の中が住みにくくなっていく様で嫌だわ、

さあ、帰りましょう」

（おばさん四人が立ち去る）

記者K「こちら、現場からMYKが

お伝えいたしました」

（レポーター気取りで冗談めかして言う）

第四場

幕が開く

刑事達は容疑者を黒板に書いて、

集めた情報をもとに、

犯人割り出しに取り組む

デカ長「おい備前どうなっとる、

容疑者の方は絞れたか」

備前「犯人の裏固めは手止りです、

何にも出てきません物的証拠も無い、

この件の犯人像が浮かんでこなくて、

どうしようもできません」

九谷「容疑者と思える人物を一人づつ

署の方へ引っ張って来ましょうか」

デカ長「うーん、締め上げてみるか」

立杭「課長、第一発見者、仏さんの義理の娘さん、次男の奥さんを連れてきました」

デカ長「ここにお通しして」

義理の娘、促されソファーに座る。

備前はその前に座る。

備前「現場で聞いた内容と同じですが、時間が経った今、どうですか、少しは落ち着かれたでしょう。何か手がかりになるような事を思い出していませんか」

娘「ええ、どうしてあんな事に、なったのか、ひどい…」

備前「お気持ちは重々お察しします。どんな些細な事でもいいんです」

娘「五時頃に、そっちへ行くからって、電話した時「待ってるわ」って、元気で喋って居たのに…、あっ！、そうそう「今日ね銀行の前で人とぶつかって、膝を地面にぶつけてね、

少し痛いの、親切な方が居てね、
落としたものを全部拾ってくれて、
家まで送りますよって、何度も、
言ってくれたのよ、大丈夫ですと、
言って帰って来たの、野次馬が来て、
みんな見ているし、恥ずかしくて、
その場から早く立ち去りたかったの
解るでしょう。
しばらぁく歩いて、ふと振り向くと、
その人心配そうに後を着いて来たの、
目が合って、会釈を交わして、
別れたんだけど、家でお茶でも、
御馳走すれば良かったかしら」って、
言ってました。
駄目よ知らない人を家に入れちゃ、
て、私は言ったんですけど…」
備前「そうですか、他に何か」
娘「私が遅く行ったばっかりに、
早く着いてれば、こんなことに…」
備前「玄関は開いていましたか？鍵は？」

娘　「戸締まりは用心してましたから、鍵は掛かってました。私は預っている鍵で開けました」

備前　「密室での絞殺、犯人が鍵を？、どうも、鍵の行くへ気になるな」

（有田が婦人警官を連れて入ってくる）

有田　「課長、婦警さんに来て頂きました」

デカ長　「萩君、婦警さんに、銀行前でぶつかった時のお婆さんのことを一部始終、詳しく聞いてくれ」

萩　「はい解りました。どうぞお掛け下さい、一部始終を目撃したそうですがその場の状況を事細かに詳しくお願いします」

婦警　「銀行の前に駐車違反車があり、その車の運転手が戻ってくるのを待っていました」

萩　「それは何時頃ですか」

婦警　「午後二時十分です。違反車の駐車時間を計っていましたから、

間違いありません」

萩　「落としたハンドバックとか、

風呂敷包みの中身については」

婦警　「全部は覚えてはいませんけど、

女性の必需品などが…」

萩　「女性の必需品とは？」

婦警　「口紅、コンパクト、ティッシュ、

香水、ハンカチ小銭入れ、財布、

封筒に、ええぇと」

萩　「封筒！、それは白い銀行の？」

婦警　「いいえ、茶封筒でしたよこれ位の」

（手で封筒の大きさを示す）

萩　「茶封筒ですか…？」

（そこえ鑑識課の一人が入ってくる。

婦警は萩に敬礼して出ていく）

鑑識　「失礼します」

デカ長　「ご苦労さまです。で、何か

手がかりが出ましたか？」

鑑識　「仏さんの死亡推定時間は、

九時から十時の間、夕飯は七時に、
済ませその後、好きなテレビを
見るのが日課でしたから間違い
ありません、指紋は照合した結果、
フアイルに該当者はありません、
デカ長　「犯人の指紋は無しか、
髪の毛については」
鑑識　「被害者の指に絡まっていた
髪の毛は犯人を特定する有力な
物的証拠です。DNA鑑定を
急ぐよう指示は出してあります」
デカ長　「いつ頃、結果がでますか」
鑑識　「採取した髪の毛も鑑定しますので、
おそらく二日後になると思います」
デカ長　「解りました。足跡とか、
靴跡は取れましたか」
鑑識　「どれが犯人の物なのか？特定
するまでにはいきませんでした」
デカ長　「そうでしたかご苦労さまでした」
（鑑識課の人、敬礼をして部屋を出る）

万年　「現場百ぺんと言いますからね、犯人が様子を見に来ていないか、現場に残された遺留品はないか調べに行ってきました」

デカ長　「うん！何か、見付かったか」

万年　「財布の三万八千円は入ったままで、三百万は消えた。見付けたのは、猫の足跡と花の種一粒」

デカ長　「それだけか」

（がっかりしていると、万年が）

万年　「ご存じでしたか玄関先のベゴニア」

九谷　「ベニア板がどうかしたんですか」

万年　「ベニヤでなくてベゴニアは、花の名前だよ、このおっちょこちょいが」

九谷　「そそっかしいのは先輩譲りです」

万年　「いいから向こう行ってろ、犯人は、犯行後、玄関の鍵を掛けて、立ち去ろうとした時に慌てて、ベゴニアの鉢をひっくり返した。その時に…」

デカ長「そ、それで、勿体ぶらずに結論を早く言えよ早くさぁ」

万年「ベゴニアの葉は手の平ぐらいの大きさになります。ひっくり返して、踏まれた葉に、時間が経ち、その葉っぱに、くっきりと靴跡が残ってました」

デカ長「葉っぱに靴跡が現れたの！、そそっかしい経験が役に立ったか」

（と言って笑った）

万年「そそっかしいは余計ですよ、それともう一つ〃閃いたのですが、実は私もなんですが、鍵を忘れたり無くしたときの用心に、玄関先のプランターの下に、スペアキーを隠しているんです。もしかして、お婆さんは外出から戻ると、鉢の下からかぎを取り出して、玄関を開けていたんじゃないかと」

萩「その事を知っている、或いは鍵を

取り出すところを見た奴が犯人の

可能性があるそういう事ですね、

で、犯行後は玄関を閉めてもとの

場所に鍵を戻した」

九谷「万年さん凄い、ヤルときゃ、

ヤルねぇ、そいつがたぶん本星や」

備前「このタコ、慌て者んが、

課長このやまは、怨恨や顔身知りの

犯行では無いと、始めから睨んで

いましたが、ひょっとしてこれで、

糸口が見えてきたかもしれませんね」

デカ長「有田君お茶…、あっコーヒーが、

いいな、出前頼んで、七人分ね」

一同「有り難うございます。

御馳になります～す」

九谷「ケーキセット付きで」

有田「はいはーい」

（有頂天になって、大はしゃぎをする）

デカ長「しょうがない、今日は、

特別フンパツしよう」

一同「やったー！。やったね！」

幕間に、下手からA子、B子、C子、D子、

上手から主婦、一、二、三、四、

歩きながら、通り過ぎる。

（歩きながら事件の話や噂話、アドリブ）

第五場

取り調べ室と刑事部屋舞台二元中継、

刑事部屋は無声音で日頃の動き、

取り調べ室で容疑者と刑事

万年「正直に答えて下さい。

バイアグラは効くかね」

長男「はぁ！刑事さんも好きですね」

刑事に親近感を覚えククッと笑う。

万年「つかみはOKと独り言を言って、

ところで会社の経営はうまく

いっているのかね」

長男「会社といっても社員五人で細々と、

輸入商品も倉庫に在庫が

だぶついてますし良くはないです」

万年「で、主な輸入商品は？」

長男「ワインとか化粧品、それに陶器類に

ガラス食器、バック類に時計、

ランジェリーにアクセサリーに

ええっと…他にも…？」

万年「解りましたよ、

最近ちょくちょく実家を

訪ねていますがその目的は？」

長男「会社の経営が不振なのでお金を

くめんして貰えないかと、母親に

相談してました」

万年「それで母親は、何て応えましたか」

長男「いつまでも親を当てにしないで、

自分の力で切り抜けないと駄目って、

いつにない強い口調で断わった」

万年「母親の遺産が早く欲しかった。

早く死ねばと思い、それで、

とうとう犯行に及んだ」

長男「私が母親を！そんなバカな！、

殺してませんよ、大切な母親を

殺された被害者ですよ、んな馬鹿な」

万年「遺産目的の犯行説、有力だと

思ってるんですがね」

長男　「随分前に生前贈与の事で、一寸言い争いはしましたけど」

万年　「玄関の鍵の隠し場所、知っていますよね」

長男　「当然鍵の置き場所は知ってますよ」

万年　「それで困っていた会社の資金繰りはどうしました」

長男　「知人の紹介でなんとか出資者から借受ける事が出来そうなんです」

万年　「そうですか、今日のところは、これで引き取ってもらって結構です」

長男　「失礼します」

（ふてくされ気味に目礼をして立ち去る）

（入れ替わりに福祉課の職員を連れて九谷が入って来る）

九谷　「私も、競馬が好きでね、競馬は、馬が走るだけにうまくいかないね」

職員　「はぁ！？、ハァーハハハ」

（笑ってごまかす格好）

九谷　「つかみはOK」

（独りごちて呟き、軽くガッツポーズ）

職員　「聞きたい事ってなんですか？」

（呆気にとられた様子で訊ねた）

九谷　「老人介護の仕事は大変でしょう。勤めて何年になりますか」

職員　「五年目になります」

九谷　「地味な仕事ですよね、年寄り相手にストレス溜まりませんか」

職員　「そ、そんなことは無いですよ、やりがいがあります。高齢者が、どんどん増え一人暮らしの高齢者のケアはこれからもっと求められます」

九谷　「安い給料で、年寄りの相手をさせられて、競馬で発散ですか！」

（わざと嫌味たっぷりに言う）

職員　「関係無いですよ、何をしようと、ぼくの勝手でしょう。お年寄りの方々はみんな私が来る日を楽しみに待って居てくれているんです」

九谷　「そうですか、競馬で負けた借金、

同僚やサラ金に借りた金が、全部で、三百万円以上というじゃないですか」

職員「誰に聞いたんですか〜、借金そんなにないですよ」

九谷「嘘つくな、裏は取れてるんだ。お婆さんがあの日、銀行で下ろした三百万円が無くなってるんだ」

職員「私が殺ったと思ってるんですか、絶対に殺ってませんよ、絶対に」

九谷「じゃ、近い内に借金が返せるらしいが、その金の出どころは」

職員「あっ、そ、それは、親父が持っていた株が上がったんですよ。その株を売ったお金は今のところはまだ銀行に預けてありますけど、兄弟三人で近いうちに分けることになっているんです」

九谷「あっそう、ところで玄関の鍵はどこにあるか知っていますか？」

職員「知りませんよ。訪問する日は、

決まっていますから必ず中から

開けてもらっていました」

九谷「被害者の死亡推定時間の九時から十時の間、何処にいましたか？」

職員「わたしのアリバイですか、まだ、疑っているんですか、アホらしい、それを調べるのが刑事の仕事でしょ、わたし帰ります。

九谷「…」

（暗黙の了解で黙って見送る）

犯罪捜査取調室

（刑事部屋ではそれぞれの動き、無音声）

萩「ブティックの経営は何年になりますか」

サッチ「十二年です。バブルの絶頂期にオープンしたのよ」

萩「その時の開店資金はどうしました」

サッチ「OL時代の貯金と退職金と、

不足分は銀行からお借りしました。

金融の引き締め、貸し渋り、

こんな不景気な世の中になるなんて

思いもしなかったわ」

萩「バブルがはじけて、店は傾き出し、

借金だけがっ残った」

サッチ「好景気に便乗して儲けたわ、

三年で借金はゼロよ」

萩「マンションも購入し、生活が

派手になってきた」

サッチ「こう見えてもね、大手商社の

地味な庶務二だったのテレビ番組で、

やってたでしょう。あの庶務二よ」

萩「地味なOL、想像つきませんね、

派手な生活から抜け出せず、

資金繰りに困る度にお婆さんの処に

再三借りに行っていますね」

サッチ「借りたと言っても、ほんの、

四、五十万づつ、在庫一掃セールを

やれば、すぐに返せる額だわ、

信用があったからお婆ちゃん

貸してくれたんじゃない」

萩「最近、店の改装をしましたね、

この不景気な時期に何故？」

サッチ「お婆ちゃんが、そうすすめて

くれたのよ高級婦人服の売れ行き

悪いでしょう、いっそのこと、若い

人向けのお店にしたらって、

その費用を出してくれたのよ」

萩「お婆ちゃんが、こんなご時に…、

今時、奇特な方ですね」

サッチ「本当です、私のお金がお役に

立てるならって、本当ですって」

萩「被害者が銀行から下ろしたお金、

三百万が現場から消えているんです。

お婆さんが銀行から下ろしたことを

貴女は知っていたでしょう」

サッチ「知りません、知りませんよ、

そんな事、ほんとに本当です。

嘘じゃありません犯人扱いしないで、

（涙声で訴える）

萩　「それじゃ、最後にお聞きしますが、あの日のアリバイは」

サッチ　「カラオケに行ってました。同好会の方達と一緒でしたから」

萩　「そうですか、証明してくれる方がおられますか？」

サッチ　「一緒に行った方にでも聞けば、失礼しちゃうわ、もういいでしょう」

萩　「今日は、これで引き取って、もらって結構です」

（喫茶店のウエイトレス、コーヒーを出前）

ウエイ　「失礼します、コーヒーを持って来ました。ハイ萩さん、立杭さん、備前さん、課長さん、万田さん、万年さん、どうぞ」

万年　「この子、いつも年の順に配りよる」

ウエイ　「違うわよ、好きな順ですよ～」

（有田に配り終わり、照れながら言う）

万年　「萩焼きの陶器みたいな、

堅物を一番、好きか」

ウエイ「何よ、万年平の平刑事の、まんねんさん」

一同（どっと笑う）

万年 憎まれ口を言って、誰かさん みたいに嫁に行けなくなるぞ」

有田「何よ、どういう意味」

（そこへ鑑識課慌てて入って来る）

鑑識「課長、DNAの鑑定が出ました」

デカ長「鑑定結果が出たか、以外に早かったじゃないか」

鑑識「どうぞ、これです」

（鑑定表を差出）

デカ長「それで…！？」

（見てもさっぱり、ちんぷんかんぷん）

鑑識「前課者のリスト全てにDNA鑑定が載っている訳ではありませんが、照合の結果前科者リストには該当者はいませんでした」

備前「犯人のDNAである確証は無いの」

鑑識

「犯人のものである事は

間違いないと睨んでいますが、

被害者に引っ張られて抜けた

毛根であると断定出来ます」

萩

「物的証拠は毛根で、血液型も

解りますね、DNA鑑定と靴跡」

九谷

「容疑者を片っ端から洗いましょう」

備前

「今までの容疑者はみんな白だよ、

無駄だと思うけど」

立杭

「もしかして！銀行の前で、

ぶつかった男、そいつが本星ですか、

備前さんに娘さんが話した中で、

一つ引っかかっていたんですが、

家まで送りたがっていたようにも、

ぶつかった相手がそこまでしますか」

備前

「そうだよなぁ、男は衝動的に

お婆さんの家を知りたいと思った」

万年

「本当は銀行でお金を下ろすところを

見て、わざとぶつかり札束を

ひったくろうとしたらお婆さんが

こけて持ち物が散乱し封筒が

飛び出した、たまたま近くに婦警が

見ていたので、その場は諦め、

後を着けることにした」

九谷　「そうですね冴えてるね、

万年さん古畑任三郎みたいに

鮮やかな推理ですね」

デカ長　「このおっちょこちょいの万年の

どこが古畑任三郎だ、その男が誰で、

どこの馬の骨かわかってんのか」

萩　「課長、銀行前から現場までの

当日の足取りを探ってみます」

（九谷を引張って、連れ出す）

備前　「近くの飲食店に立ち寄った形跡が

ないか聞き込みをしてくれ」

二人　「はい、解りました」

（敬礼をして立ち去る）

第六場

デカ長、記者会見、

報道関係者の質問に答えている。

（アドリブで会見の様子を）

ウエイトレス、刑事との談笑

（アドリブで談笑している雰囲気を）

そこへ有田が近づいて来て。

有田　「貴女のいい人は、萩さんなの、それとも、他に好きな人いるの」

ウエイ　「他にいないわよ、知り合いと言えば警察関係の人ばっかりで」

有田　「刑事の奥さんは大変よ、時間が不規則だし、苦労するわよ」

ウエイ　ありたさんも、その刑事さんが、すきなんでしょう」

（女同士の会話から、デカ長にターン）

デカ長　「萩君、本星の顔がわれたか？」

九谷　「目撃証人は今のところまだ見つかっていません」

デカ長　「君には聞いて無い」

九谷　「はい、婦警さんにも顔を見てないか確かめたんですが」

デカ長　「そんなことはとっくに備前君が確かめている。犯人は婦人警官に気づいて、顔を見られないように俯いて、眼をそらしたままいたのだろう。

面が割れたら困る人物だ」

萩

「私も、星には前科があると考えています、事件のあった日の、夕方五時頃から八時の間に絞って、見かけない男が来なかったか、飲食店関係を当たったんですが、無駄骨でした。

万年

「そう、ガッカリするな、能登の穴水と言う所の漁師は、ボラをどうやって獲るか知っとるか、海に網を仕掛けて、高い櫓の上からボラが張った網に入るのをじっと何時間も待つんだ」

（電話がけたたましく鳴った）

万年

「ほーら網に掛かったぞ」

備前

「はい捜査一課、はい……はい、はいそうですか、ご協力有り難う御座います。

見覚えのない客で何となく怪しげな男を思い出したと言っています」

デカ長　「そいつが例の男か、犯人の顔は」

備前　「犯人かどうか、モンタージュを作ってみないと解りませんが」

萩君、「ここえ行って、今の人を至急、連れて来てくれたまえ」

（でんわの主のメモを渡す）

萩　「はい、行って来ます」

備前　「七時頃にうどんを食べに来た男が、お婆さんの事をさぐるように、聞いて帰った男が居たそうです。テレビ番組のサスペンスドラマを見ていて、フッと思い出したんだと、言っています。

幕間

幕間に　入れ替わり立ち代わり、疑われた三人がぼやきながら歩く。

職員「白い目で見られて、役所に居ずらくてしょうがないや、事件がはっきりするまでは、老人介護の仕事もやらせて貰えない、やりがいがあったのに、この際、競馬止めよ、止めたら、別れたあいつ、帰って来るかな」

（下手に下がって行く…）

長男「あぁ～おふくろが亡くなって、ポカンと胸に穴が開いたようだ、穴が大きい分、それだけおふくろを頼っていたんだな、そのうち、親孝行するよっと言ったら、ときどき相談に来て親に心配かける、お前はそれで十分孝行息子だよって言ってくれたこともあったなぁ、それにしても不景気になったもんだ、輸入販売も止める潮時かなぁ…」

（うなだれながら、下手に下がる）

サッチ「イヤンなっちゃうわ～

あのへぼ刑事め、私を疑うなんて、
外見が派手で借金してたら、
容疑者扱いかい、失礼しちゃうわ、
私、こんなんじゃなかったのに、
お金、お金、そうよ、あのバブルが
いけないのよ、見栄を張るのも、
派手な暮らしも止めようかしら、
私は地味な庶務二がお似合いなのよ
オホホホッ」
（高笑いをしながら、下手にはける）

第七場

幕が開き活気に満ちた刑事部屋

デカ長　「前課者リストにモンタージュと
そっくりの男が居た。うどん屋に
寄った男に間違いないらしい」

備前　「指命手配を本部に通達しました」

デカ長　「お〜い、九谷はどうした」

万年「あのおっちょこちょい、犯人のモンタージュコピーを持って、急いで飛び出して行きました。何か？かぎつけたんでしょうかね」

（電話が鳴り響く）

萩「課長、犯人が見つかりました！。競馬場に居るそうです。逃がさないように、九谷が星を見張っているそうです」

デカ長「まだ犯人とは断定出来ない、そいつを逃すなよ、捕まえて来い、逃がしたら、警視総監賞どころか、警察本部長賞も捜査一課長賞までも逃げてしまうぞ、ほれっ、競馬場へ早く、全員で行って来い」

（万年、備前、立杭、萩、飛び出して行く）

有田「頼もしい、恰好いい、ステキ！、惚れ直しちゃうわぁ～」

デカ長「誰のことだい、備前君だろう、ズ、ボ、シ、だろう…」

有田　「違う、違いますよ、課長の事を言ったんですよ、フンだ」

デカ長　「不倫は、不倫はいけません、クリントンじゃないんだから、懲戒免職になるからね…」

有田　「あらまぁ、冗談ですよ、冗談」

（ウエイトレスが出前を持って来る）

ウエイ　「失礼します、コーヒーを、あれっ！萩さんは、皆さんは」

有田　「残念だったわね、皆さん、出て行ったわ」

デカ長　「注文したこと忘れてた、三人で、ぜんぶ飲むか」

（暫くして容疑者の男を連れて戻って来る）

九谷　「課長、只今戻りました」

（ハ〜ハ〜と、鼻息を荒くしている）

デカ長　「ご苦労！でかした、競馬好きも時には役に立つねぇ」

九谷　「星は、競馬場に絶対にいると、まなこを皿にして探しました」

萩　「それを言うなら血まなこに

なってでしょう」

九谷　「ナイスツッコミ！見つけた時は、

万馬券を取ったような気分でした」

万年　「ははは、お前らしいな」

（皆で大笑いをしている）

九谷　「芸は身を助ける、好きこそものの

上手なれってね、よく言ったもんだ」

萩　「それ、一寸、的はずれじゃない」

取調室

備前　「お前が殺ったんだな」

立杭　「素直に吐いた方が、

気が楽になるよ」

犯人らしき男　「知りません、

殺ってません」

備前　「獲った三百万、どうした」

犯人　「三百万！何の事ですか？

何にも知りません、二日前に

こっちへ来たばっかりで」

殺人事件があった事もぜんぜん知らなかったんですから本当です」

（立杭が、つかつかっと側に行き）

立杭　「お婆さんが、後ろからこうして、首を絞められ、殺されたんだよ」

（ドサクサに紛れ髪の毛を引っ張る）

犯人　「痛えなっ、いきなり何するんや」

立杭　「これが動かぬ証拠か」

（と独りごちて取調室を出る）

立杭　「大至急これを、鑑識課へ」

備前　「務所帰りのお前が競馬をする金をどこで手に入れた」

犯人　「人聞きの悪いことを言わないで下さいよ、前課者だからって、白い目で見るのは止めてもらえませんか、疑わしくは罰せずって言うでしょう」

備前　「それは、俺の言った台詞だよ、ひとレースに五万円も賭けていたそうじゃないか、そんな金をどうして持っていたんだ」

犯人「昨日、駅前のパチンコ屋で、久しぶりにやったらフイバー、しちゃって、出るわ出るわ、大箱三杯」

（にやけた顔で、指を三本立てた）

備前「口から出任せ言うな、正直に吐け」

（冷静な備前が激昂した）

立杭「DNAが一致しました」

（備前に耳打ちして調書席に戻る）

備前「犯行現場の髪の毛と、お前の髪の毛のDNAが同一人物のものであると断定した。

今履いている靴の靴底とベゴニアの葉に残っていた靴跡も一致した。

これだけ証拠が揃った。観念しろ」

（暫く沈黙の後、犯人の口から）

犯人「刑事さん、ス、すみません私がやりました。

パチンコに負けて銀行の前を通ったら、銀行から出て来たお婆さんとぶつかった拍子に、

バックが飛んで、中身が散らばって、

慌てて拾ってやりました。

その時、手の感触で封筒の中が

札束だなって解ったんです」

備前「それで、後を着けたんだな」

犯人「遠くから家に入るのを見届けて、

一旦、その場を立ち去りました」

備前「鍵の隠し場所も、その時に

見てたんだな、そうだろう」

犯人「えぇ、これなら玄関から入るのは

簡単だなと思いました」

備前「馬鹿野郎それは息子さんの為に

そうしていたんだ」

犯人「殺す気なんかなかったんです。

どうして、殺っちまったのか、

お婆さんが大声を出して騒ぐので

つい、殺す気はなかったんです」

（机を叩き、泣き伏す犯人）

暗転

七人の刑事、ほっとして

くつろいでいる。

（そこへウエイトレスがコーヒーを

持って入って来る）

ウエイ

「コーヒーをお持ちしました。

事件が解決して良かったですね、

今日は、私からのおごりよ」

（萩に、そっと近づき）

ウエイ　萩さん、事件が解決して、

これで暫く暇が出来るでしょう。

今度わたしとデートしてね」

デカ長　「みんな良くやってくれた。

誰の手柄でもなくチームワークの

勝利だ。それぞれが個性と言うか

特徴を生かして捜査に取り組んで

くれたと思う。よって警視総監賞は、

代表のわたくしが頂く」

一同　「ずるいですよ、それは傲慢だ」

（異口同音に、言って大笑いする）

暗転

翌日、刑事達が今回の事件の

整理と報告書作成中のところに。

（疑われた三人現れて刑事達、唖然となる）

職員　「女房が戻ってきて仕事に復帰できて頑張ってます」

長男　「実家に戻って花を育てて、花屋をすることにしました」

サッチ　「地味な生活に戻って、派手な生活を止めることにしたわ」

刑事一同　「それは良かったですねぇ」

（手揉みしで愛想を良くする）

報道関係者、どどどっと乱入。

記者達　「犯人は、どんな人物ですか、動機は何だったのですか、証拠は、立件できたんですか、起訴は」

（などとマイクを向けられる）

刑事達は逃げ惑い、てんやわんやとなる。

『完』

あとがき

七人の個性豊かな刑事が、犯人を逮捕するまで、面白、可笑しく、ユーモアを交え、解りやすく、展開していきます。

セットは刑事部屋と取り調べ室のみ、幕の間に女性を多く出演させ、劇の幅を広げた。幕間を有効に使い、捜査の進展と、主婦の日常的な会話の面白さを出した。

劇中に登場する人物のキャラクターを明確にし前面に出した。

人間の喜怒哀楽、気持ちの変化が、テンポ良く顕著に現れる様にした。

舞台劇のジャンルを盛り沢山に組入れた。

漫才の惚けと突っ込みのようなせりふ、人情話的な場面も取り入れしんみりさせといて笑わしたり、シリアスな展開の中にもコント風に変化させたり、時代背景、社会風刺、知識、情報、流行、人間性を台詞で表現し、

物語の山あり谷ありの、谷の部分がダレ無い様に、展開にリズムを持たせた。

観客は後頭部で考えてから反応し、そして、笑ったり、泣いたり、納得したりするのではなく、前頭部で受け直に反応し感情が出る、極力単純明快な内容にしました。

そのためにも、固有名詞はなるべく台詞で、使わないように計らいました。

舞台二元中継、台詞付きで演じている取り調べ室、一方刑事部屋は口ぱくで演じたり、パントマイム風に日常的動きをしたりして、刑事部屋の臨場感を出すようにしました。

一言で言うなれば、長崎チャンポン麺のようなイメージのドラマ仕立てにしました。

脚本：寺沢憲重